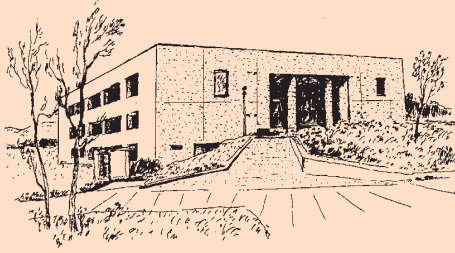


福島大学附属図書館報

No.37 2006.10.1 発行

書 燈



〒960-1293 福島市金谷川1番地
TEL (024) 548-8083
<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>
携帯電話版
<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm>

福島大学附属図書館

図書館随想

人間発達文化学類 澤 正宏

図書館に対して私はロマンティストである。30代の終わりまでは、文学に関わるであろう書物については、何処の図書館、古書店の何階の何処の棚にどんな本があるかはよく記憶していたのだが、図書館にも出かけなくなり、全国的にみて古書店もカタログ販売が主流になるに連れて、また加齢も大いに手伝って、その記憶の集積は雲散霧消してしまった。もっとも、3千万冊が世界最大クラスの図書館の蔵書だそうで、フルに使うことがもし可能なら、人類の最大の遺産としての脳髄はこの数量に相当する記憶ができるそうだから、私の記憶などは知れたものである。

『薔薇の名前』や『はてしない物語』などのような、図書館や書物をめぐる本格的な小説や物語は、その構想力・想像力を楽しみながら読むことにしているが、時にそれは、現実的には自分が図書館や書物と深く関わることがないことを感じさせることでもある。それでも情報発信や管理システムが進んでいなかった時代の図書館には、実際に手にとって書物や資料の発見ができるという楽しみがあった。慶応大学では破損寸前の古い新聞を自由に閲覧させてくれたり、大阪外大では煎餅のようになってしまった19世紀の洋書を快く貸してくださった。発見といえば、必要があるので実物を見るためにイギリスまで行こうと考えていた矢先、世界で48部しか印刷しなかったという、古書値で1千万円の書物と東大で出会ったこともあった。失敗もあって、天理大学では何階であったか、書物の多さと部屋の広さのために書庫の中で迷子になってしまった。

図書館が文化と深く関わることは言うまでもな

い。ダブリンのトリニティ大学のような見せる図書館も素敵だが、製鋼業で成功し全財産を教育振興に寄付したアンドルー・カーネギーのように、誰でも自由に使える図書館をつくることも大切で、彼は3千もの図書館を建て、現在も盛んに利用されているというから素晴らしい。日本では各学校に専門の図書館司書をおくよう法的に決まったのに、当分それは見送られている。文科省の国語力低下の対策として、2002年から5か年計画で始まった小中学校の図書館整備も、交付税として自治体に支給される予算が他に回るため、最終年度の今年度になっても、学校規模に応じた蔵書数の達成をみていない学校が多い現状である。

そうしたなかで、本を買わず建物も建てないで新しい図書館をつくるという矢祭町の節約図書館運動は逞しい。全国から本が届き10万冊を突破したというから、眠っていた本も生きる。貸し出し業務も住民全体で運営するというから大変だが、一つのモデルになればと考える。学力世界一で話題のフィンランドでは、1997年以降、国が政策として図書館の充実を図っている。そのためか図書館利用率も世界一で、国民の77%が1日1時間の読書をし、1人当たり年21冊の本を借りるというデータが私の手元にある。日本でもハード面の整備と、子供の発達段階に応じた指導が出来る専門の読書指導員の養成などといったソフト面の取り組みも急いで欲しいものである。そのなかからマルクスやコリン・ウイルソンのような、図書館生れ、図書館育ちの学者や作家が育つ可能性があるであろう。

思い出の一冊『O.Henry 短編集』 共生システム理工学類 高橋 隆行

皆さんは、本棚に並んでいる本の中で、何度も読み返したものはありますか？

私の読書は、主として中高生の頃に集中しました。その頃に読んだ文庫本などが、表紙の一部が色あせながらも本棚に並んでいます。そのほとんどは読み返すことはまずありませんが、ときおり無性に読みたくなる本があります。それは、オー・ヘンリ (O. Henry) の短編集です。「最後の一葉」や「賢者の贈り物」などの作品は、特段、読書が趣味で無い人でも、恐らく一度はどこかで読んだり聞いたことがあるのではないのでしょうか。

オー・ヘンリは1862年9月、ノース・カロライナ州に生まれました。1910年に亡くなるまでの間に約380編の短編を残しました。確かに彼の短編は、少なくとも私にとって珠玉の作品ばかりです。私は、平均すると1年に1回程度、この本を本棚から引っ張り出し、ほこりを落とし、寝転がってページをめくります。既に何度も読み返しているわけですから、ストーリーのほとんどはわかっています。で



も、行を追うごとに、文字で描かれている情景が具体的な絵としてフルカラーで再び眼前に広がり、リアルな人物がそこで動き始めます。

読み返してみてもいつも思うのは、浮かぶ情景にしても登場人物にしても、以前に読んだ際に感じたものと大抵は異なっているということです。色や気温、舞台装置も頭の中で少し修正され、新鮮です。また登場人物についても、それまでに感じていたものとは違う生活背景や行動動機などを感じます。違う役者と違う演出家で、同じ脚本を再上演しているような感覚、というと上手に説明できているのでしょうか。1年の間に得た新しい経験や自分自身の成長(あるいは堕落)が、新しい役者や演出を生み出しているということなのでしょう。このような楽しみ方のできる芸術は他にはそう多く無いだろうとも思います。少なくとも私にとってのオー・ヘンリ短編集は、1年に1度だけページをめくる本として、今後もずっと私の本棚に鎮座し続けることになると思います。

カウンターの内側から

高玉宏太郎 (教育学研究科2年)

先日、このような方がいらっしゃいました。閉館を告げる音楽が流れ始める頃にカウンターに来られたその方は、もうすぐお祖父さんの誕生日なので、お祖父さんが生まれた日の新聞をコピーしてプレゼントしたいというのです。

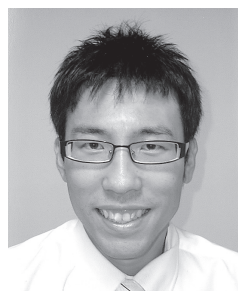
そこで、その方のお祖父さんの生まれた大正9年8月1日付の新聞をお持ちしました。図書館の地下、保存書庫には過去の新聞やその縮刷版が保存されており、復刻も含めて明治時代のものまで閲覧することができます。

その日の新聞は特別なできごとを報じたものでもなく、私はその閲覧申込みがなければ手することはなかったでしょう。しかし、その方にとっては特別な意味をもつ大切なものでした。

ときに、自分が必死に読んだような本を借りていく人がいると、借りられていくその本を一瞬、

目で追ってしまうこともあります。ですが、閲覧申込みのあった本を書庫から探してくるときや、返却された本を書架に戻すときに手する本のほとんどは、図書館の仕事をしていなければ出会う機会のなかったであろう本ばかりです。本館の蔵書数は80万冊を超えますし、大学図書館の性質上、専門書が多いのでそれは当然のことかもしれません。図書館で仕事をしていても一度も手にすることない本がかなり多くあるでしょう。

それでも、カウンターで何気なく扱っている一冊一冊の本が、他の人にとっては大きな意味をもつことがあるということを、ときどき不思議に思います。



海外の図書館事情 ジュネーヴ国際高等研究所図書館 行政政策学類 鈴木めぐみ

2004年9月から2005年8月まで一年間、スイスのジュネーヴにある、ジュネーヴ国際高等研究所(H E I)に客員研究員として滞在する機会を得た。

H E Iは、国際関係に特化した、著名な高等教育機関であり、世界中から学生(大学院と学部相当)、研究者、実務家が集まってきている。政治学、国際法(国際公法・国際私法)、国際政治史、国際経済の4つのセクションがある。ジュネーヴ駅から歩いて20分から25分、レマン湖のほとりの広大な公園の中に立つ Villa Barton という建物を本部とし、他にも5カ所分散して校舎がある。隣がW T O(世界貿易機関)。大学院の図書館は、なぜか、W T Oの地下にある。この Villa Barton は、大きくはないが、昔ながらの美しい建物である。かつてはこの上の方の階に図書館があったそうで、とても狭かったとのこと。Villa Barton もW T Oも湖岸まで歩いて1分。周りは一面の芝生と、木立、それも見事な巨木が点在する。鳥がさえずり、リスが走り回って木の実を集めていた。法律関係の授業は Villa Barton でやる場合が多かったが、教室からはレマン湖が一望のもとに見渡される。建物が塙で区切られておらず、公園と一体化している。朝な夕な市民が周りを散歩していた。

授業は仏語で行われるものと、英語で行われるものの両方が存在し、どちらかの言語だけを使って卒業することが可能ではある。私も授業に二つ出させてもらったが、実際には、授業中英仏の両方の言葉が飛び交う。先生は基本的にはどちらかの言葉で話す。講義形式、ゼミ形式、両方があったが、日本のように、学生が一コマ黙って聴いて帰るなどということはありません。必ず、質問、意見が求められるし。学生もよく手を上げて発言する。こういったディスカッションは基本的にはその授業の使用言語でなされるが、学生がその言葉が苦手うまく言えない場合、得意な方の言葉で発言することが認められているのである。先生は、その発言の言語で答える。他の学生も基本的にはどちらかを聴いてもわかるのである。

このような授業、そして研究を支えるための図書館であるが、前述のように、お隣のW T Oの地下にあった(他の校舎にも本はあるらしいが行かなかったので不明)。入って右に映像メディア関係を統括する小さい事

務所と、50台ほどのコンピュータールーム。入ってすぐにはソファがいくつかと、飲み物の自動販売機があり、学生がよく休憩している。正面をすすむと図書館で、開架式の書棚とカウンター、閲覧の為の机数十個があった。原則窓は無く、明かりとりの壺庭に面した所だけ外光が入った。

蔵書は、ほぼ英語・仏語のものかつ国際関係に限定されていた。私が利用した国際法に限定して述べる。まず、現物としてあるものに関しては、主要な概説書や雑誌、モノグラフはそろっており、授業の準備に苦労することはないが、修論の執筆の為には、おそらく他の図書館に行く必要もあるだろうという感じであった。古い文献や一次資料は少なめである。但し、H E Iの学生はそこから30分程の国連欧州本部の図書室を学生証を提示することで利用可能であるということであった。提携しているジュネーヴ大学の図書館を利用している学生も多かった。蔵書の検索は、ジュネーヴ近辺の大学をカバーするネットワークがあり、それで所在を確認する。また、e-resources が充実しており、学生は大学が契約しているそれらの資料にアクセスでき、プリントアウトできる。コンピュータールームの紙は学校もちであった。ただし、学生には利用できる枚数の上限があるとのこと。研究員には上限は無かった。

専門によって差はあるが、在外研究の日々は図書館にいた時間が長くなる。ジュネーヴというと、黙々と勉強する学生たちに囲まれた、乾燥してちょっと寒い、あの空気が蘇ってくる。土産話になることはまずないが、大切な記憶である。

参照 <http://hei.unige.ch/bib/index.html>



学術機関リポジトリ!!

副学長(研究担当) 小沢 喜仁

大学が確保しておくべき多様な学術コンテンツの中で、特に大学の教育研究活動の成果である学術情報の収集、組織化、保存及び発信のための仕組みとして、「学術機関リポジトリ」が全国の大学で注目され、その構築が急務の課題となっています。

学術機関リポジトリ (Institutional Repository) とは、大学等の学術機関で生産された知的生産物を電子化して保存し、インターネット等を通じて原則的に無償で公開することを目的として学術機関自らが構築する情報発信システム(貯蔵庫)のことです。新時代に向けた学術コミュニケーションのためのインフラとして誕生し、登録された論文や教材などの学術情報は、世界規模の文献データベースに組み込まれ世界中の研究者にオープン・アクセスを提供します。

大学の教育・研究活動の成果を広く社会に示し、大学のブランディングに寄与し、社会への説明責任を果たすとともに、研究評価の際の基礎資料としても役立つであろうと期待されています。

学術機関リポジトリの期待される効果として、大学の教育・研究成果に対する視認性とアクセシビリティの向上、社会に対する大学の教育・研究活動の説明責任の履行、大学で生み出された知的生産物の長期保存、商業出版社が独占する現行の学術出版システムに対する代替システムとして様々な効果をあげることができます。

科学技術・学術審議会学術情報基盤作業部会においても「学術情報基盤の今後の在り方について(報告)」(平成18年3月)の中にも、学術機関リポジトリの推進が今後の重要な課題であると指摘されています。

本学では、上記のような社会的要請・課題に応え、学術機関リポジトリ構築に向けて検討するために、情報メディア委員会の学術・教育情報専門委員会に「学術機関リポジトリ構想に関するWG」を立ち上げ、検討を重ねてきました。平成18年3月9日開催の情報メディア委員会において、その報告があり、学術機関リポジトリ構築に向けての

課題整理がなされました。

具体的には、①学内合意形成について ②登録コンテンツを継続的に確保することについて ③著作権処理について ④システム構築について ⑤学内諸機関との連携についての5つの課題について検討・整理され、学術機関リポジトリ構想の実現に向けて「学術機関リポジトリ運用に関わる基本方針」の作成など具体的作業を行う必要があることが確認されています。

一方、国立情報学研究所では、本年「次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業」の委託事業として学術機関リポジトリ構築・運用事業を公募しました。この事業は、大学からの情報発信力を強化し、大学における教育研究活動の視認性を高めることによって、大学の社会的責任を果たすことを目的として、大学の独自性を生かした機関リポジトリの構築・運用を推進するものです。これまでのコンテンツ関連事業の成果を継承、拡充させ、次世代学術コンテンツ基盤の整備に資するためとして、国公私各大学における機関リポジトリの構築とその連携を支援するための委託事業です。

本学でも、情報メディア委員会におけるこれまでの議論に基づき、附属図書館が中心となり、委託事業に対して申請をし、平成18年度から平成19年度にわたる、委託大学として選定されました。

8月開催の情報メディア委員会において、選定されたことの結果報告があり、委員会の下に学術機関リポジトリ構築部会、学術コンテンツ部会、学術機関リポジトリ普及推進部会の3部会を設置し、大学全体の事業として取り組むべき事業であることが確認され具体的な手続きを進めることになりました。

特にこの事業の推進にあたっては、学術機関リポジトリが大学ホームページと並ぶ、学術研究面における大学の「顔」として、従来型の学術出版を補完する世界に向けた成果公開の場として期待されており、大学としての積極的な取り組みと関係者の協力が欠かせないものとなっています。

貴重本 『Johan Frederik von Overmeer Fisscher』 人間発達文化学類 磯崎 康彦



『日本知識への寄与』扉絵
(請求番号：382/O92b)

ヨーハン・フレデリク・ファン・オーフェルメール・フィッセル (Johan Frederik van Overmeer Fisscher) は、文政3年(1820)6月、バタヴィアを出立し、翌月下旬に出島へ上陸した。

出島オランダ商館の書記官として、20歳のときの来日であった。フィッセルは、文政3年より文政12年(1829)2月まで、この間二度バタヴィアへ戻るが、出島オランダ商館の書記官、荷倉役として勤務した。日本滞在中のフィッセルにとって、最大の事件は江戸参府であったろう。文政5年(1822)、フィッセルは商館長ブロムホフに随行し江戸へ赴いた。江戸では、桂川甫賢、大槻玄沢ら多くの蘭学者と会い、自らの専門でない天文学・暦学・物理学などの質問を受けて当惑した。しかし、蘭学者の持参した蘭書を翻訳することにより満足させた、という。フィッセルは、シーボルトと同様に日本の地図・書籍・絵画・焼物・仏像・武具・楽器・植物・衣服・道具などあらゆる種類のものを収集したが、江戸参府はそれらを買求める良い機会でもあった、と思われる。

ブロムホフ前の商館長ドゥフは、日本人との接触が広く、かつ滞在も長期であり、その間、ハルマの蘭仏対訳辞書をたよりに蘭日辞典に着手した。フィッセルはこれに注目し、文政6年(1823)来日したシーボルトとともに、ドゥフの残した草稿を借用しつつ、蘭日辞書の著作に励んだ。しかし、蘭日辞書の著作中、しかもシーボルト事件で騒がしいなか、帰国令を受けた。バタヴィアを経、

オランダへ帰ったフィッセルは、1833年『日本知識への寄与』(Bijdrage tot de kennis van het japansche rijk)をアムステルダムから出版した。わが国では、一般に『日本風俗備考』といわれる。320頁からなるこの蘭書は、次のような構成である。

- | | |
|--------------|------------------|
| 1. 一般的序説 | 2. 地誌と地形 |
| 3. 科学 | 4. 古物と珍品 |
| 5. 絵画芸術と素描芸術 | 6. 宗教 |
| 7. 兵学と武器 | 8. 豪奢と贅沢 |
| 9. 娯楽と楽しみ | 10. 動物、植物、その他 |
| 11. 家事と衣服 | 12. 手仕事、建築、船舶 |
| 13. 雑録 | ジャワから日本への旅 出島の記述 |

日本の首都への旅行記

ここに載せた扉絵は、「伏羲と神農、これは最初の日本人夫婦であり、さらに風神と雷神像、かつまた将軍の紋章を加えた。この紋章は鶴、つまり幸福の象徴像によって守られている」と説明する。伏羲・神農・風神・雷神は『北斎漫画』三編に見られ、これを出島の絵師川原慶賀が模写し、模写図が絵画収集品としてオランダに渡った。『日本知識への寄与』出版のさい、オランダ人画家が模写図を再構成し、扉絵として完成させた、と考えられる。フィッセルは、文政3年から同12年の間、日本での見聞や体験をもとに、かつ収集した資料や先学者の日本研究を参考として『日本知識への寄与』を書きあげた。地理・神々・天皇・法律・政治・習慣・性格・言語・歴史・戦争・衣服・道具・職業・商業・農業・裁判・交通など広範囲にわたる。比較的好意的な記述が多い。『日本知識への寄与』は西欧で好評であったばかりか、わが国でも注目され、幕末に杉田成卿・箕作阮甫らの蘭学者によって分担翻訳された。22巻からなる『日本風俗備考』である。

図書館からのお知らせ

祝日開館開始！

4月から祝日開館を始めました。
開館時間は、10時～17時です。
休日はぜひ図書館でお過ごしください。

図書館メールマガジン「Library Today」

ホットなお知らせ、新着図書案内などお役立ち情報満載。
ご購読(無料)の申込みは下記から。

<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/mailmag-index.htm>

各種出版物に掲載された経済学部関係逸話

～『信夫の風』～(2)

新保 芳栄

広く知られている戒能通孝『いかに生き、いかに学ぶか』(講談社現代新書、1966年)では、福島大学経済学部の日本経済史研究室は、近世日本経済史学では最高の水準に達しており、「日本経済史を勉強するために福島大学へ入学しよう」と薦めている。経済学部の建物や設備の悪さはおそらく日本有数だろうが、研究者が優れ、梶山力、藤田五郎両教授の遺風が残っているうえ、教授の人選も庄司吉之助教授は小学校卒業だけなど、学歴など全く問題でないことを示していると指摘している。庄司先生の評価については、「ちくま」(筑摩書房)1985年10月号の遠山茂樹「庄司吉之助さんのこと」が温かい眼差しで、かつ詳細に研究者庄司吉之助を描いており、秀逸の記事と言えよう。庄司は特異な経歴と、精力的な地域史研究で著名な歴史家であり、半ば伝説化したエピソードに富んでいるが、それはいかに多くの人から愛され、慕われていたかの証明であるとして、凄まじいばかりの資料収集と真摯な研究姿勢、「彼の学問がいつまでも清新で活力があったのは、地域の史料に根を張っていたからであろう」と余す所なく庄司吉之助の人物像を伝えている。

小林昇先生に関するものは、枚挙にいとまがない。特に「未来」(未来社)には、先生と同社との関係が深いこともあり、関連記事が多く目に付く。杉山忠平経済学博士の逝去に際し先生自身の弔辞も掲載されている(1999年5月号)が、飯田鼎慶應大学名誉教授の追悼文(1999年6月号)の中で、杉山氏が「小林さんがネ、月に一度、食事に招いてくださるのが楽しみですよ」と、何度か話されていたとして、杉山～小林先生の交友関係の深さを披露している。また、同社の西谷社長がコラム欄(1990年3月号)で、小林先生が福島大学で教鞭をとっていた時、『重商主義解体期の研究』という名

著を出版し、それを教科書として使用した話を紹介している。それは売れない専門書を出してくれた出版社の負担を少しでも軽くしてやろうとの思いやりからだったことは確かであるが、小林先生は信念として「講義を受けるからには先生の本ぐらいは読むべきだ」との考えを持ち続けていたようであると言う。自著を教科書にすることは、相当の自信と信念がなければ出来ないことであり、優れた研究者の典型例として挙げている。

田中敏弘関西学院大学教授は、『アダム・スミスの周辺』(日本経済評論社、1985年)の中で、小林先生の学問を論ずる時の厳しさと、あの穏やかな思いやりの深い眼差しから、大きな学問的励ましを与えられた若手研究者が、私の他にどれほど多くいることかと述べ、ベトナムでの戦争体験に基づく先生の研究者としての生き方が人々を惹き付け、人間の営みの最も深いところで、人の心を揺さぶるのであらうと、先生の経済学史研究の魅力を説いている。作家の中野孝次氏は小林先生の凜とした格調高い文章を随所で絶賛しているが、「みすず」(みすず書房)の2002年読書アンケートでも、興味を感じた本として『山までの街』を挙げ、「86歳の経済史学者による、そのかみの福島高商時代の回顧。学に志す若々しい時代の空気がよく描かれている」と評価している。また、大石嘉一郎先生の最新刊『日本近代史への視座』(東京大学出版会、2003年)では、付録として「福島時代の小林さん」や、1956年に自身が福島大学の同僚らと参加した福島県伊達郡伏黒村調査の時の回想等がまとめられている。

つづく
(『信夫の風』第2集より転載
第2回)



一般開放に感謝！ — 利用者の声 —

西山 泰男

人は本の利用についてはさまざまであろうが、豊かな人間になりたいという欲求を満たすための読書もあるだろうし、私の場合はほとんどそれらと無縁であり、学生時代から今日まで農村調査の前の予備知識を得るための資料探しとそのノートづくり、統計表等々、それは歴史性、地域性、階層性、市場性という視点からの概況把握にあった。

したがって大学図書館でそれらの資料集めとでき得る限りの状況を知ることになった。

私の若い学生時代は今の学生とは全く無縁であろうが、専ら寮生活のなかにあって先輩や友人たちの影響を受け、出隆の『哲学以前』や『出家とその弟子』倉田百三著、阿部次郎の『三太郎の日記』、西田幾多郎の『善の研究』やトルストイの『戦争と平和』等々を読みふけた時代があった。

なかでも内村鑑三の『後世への最大遺物』は新鮮な震えるような感動を覚えた。

そして寮のストーブを囲んで夜の更けるのも忘れ

て激論を交わすことがよくあった。その一方で風早八十二の『日本社会政策史』や山田盛太郎の『日本資本主義分析』とか、しだいに農業問題に接近していくのを契機に農村調査に入るのもこの頃からである。

福島に移ってはや40数年、その間県内では最も多く通ったのは会津であり、それも南会津の山々に魅かれ、その折での調査が最初であったように思われる。それが米の生産調整に入った1970年代以降頻繁に通うようになった。県外では東北はもとより、北海道、長野をはじめ、東海、最近は四国まで足を伸ばしているが、時間や農家の都合を聞いてからよくでかけた。それが米から果樹に移り、長野苹果地帯と福島苹果との対比、それは農協の共販に明確な開きがあった。また、東海の柑橘地帯における農協の事業との関わりを調べることになって、始めて当大学図書館で探しに探していた石川武彦の園芸経済の文献を書庫でみつけたときの感動は月日のたった今日でも鮮明に残っている。心から感謝申しあげたい。

こんなものがあったのか！『日本山岳遭難史』 地域政策科学研究科 鈴木 貴士

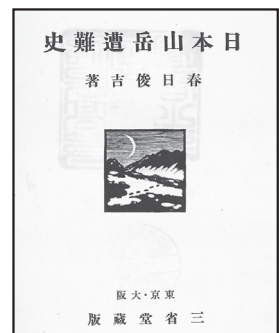
自然豊かで山々に囲まれた福島大学…。そんな大学に通う私が選んだ本は、春日俊吉の『日本山岳遭難史』(以下『遭難史』)である。「遭難史だなんて。他にもっと紹介する本はあるんじゃないか…」という読者の方々の反応が早くも脳裏を過ぎるのだが、早まっではいけない。これは色々な意味で「深い本」なのである。

この本は、(当たり前だが)タイトル通り遭難のお話しが延々と書いてある。当然の事ながら、登場人物はもれなく遭難し、その殆どが天に召される。春日氏も気になされたのか、本文中での遭難者数を数えて「三百八十余名の方々の、紙上墓標をお立てした」(7頁)と書いている。無論、ただ遭難事件を書くことが目的なのではない。この本によって、一件でも新たな遭難事件が回避されることを望むと、筆者の春日氏は本文中で述べておられる。

『遭難史』は昭和8年に発刊されており、扱われる遭難は、主に大正、昭和初期のものである。当時は、

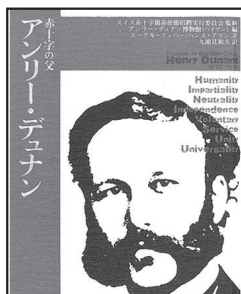
現代とちがって「気象衛星ひまわり」もないし、無線機も普及していない、ましてGPSなど夢にも思わない時代である。いかに遭難のリスクが高いか、お分かり頂けるだろう。しかし、現代とて無計画に何の用意もせず山に登ろうものなら、当時と変わらぬ状況が待っていることも忘れてはいけない。冬、金谷川から福島まで自転車で移動しようと試みて御覧なさい。途中で吹雪いたら間違いなく、遭難だ。…『遭難史』は、そんな警鐘も鳴らしてくれる本なのだ。

遭難とは、人間の生への欲望と環境の死への強制力が最も鋭く対立する場である。そんなシリアスな状況も、すっきりと読みやすく書かれているこの『遭難史』。アルピニストならずとも、是非一度手に取っていただきたい本である。



(請求番号：786/k1/1)

学内教員著作寄贈図書



『赤十字の父 アンリー・デュナン』

春風社 2005.10

九頭見和夫 訳

請求番号：289.3/D97s

本書は、スイスにある「アンリー・デュナン博物館」によって出版されたエーテル・コッハー／ハンス・アマン共著の“Henry Dunant, Sein wechselvolles Leben und seine erstaunlichen Visionen.”(2003)の翻訳である。

現在、192カ国、一億人の会員を擁するといわれる「赤十字社」の存在を知らない人は、少なくとも日

本ではほとんどいないであろう。しかしその創始者であるアンリー・デュナンについて知る人は、「赤十字社」の会員を除けば極めて限定されるのではなかろうか。ナイチンゲールの名前を多くの小学生が知っているのに比べるとその違いは驚くほどである。それゆえ、例えば総合教育誌『悠 12月号』(ぎょうせい、平成17年)が本書を紹介する記事の中で、「本当の敵は隣国ではなく、冷淡、悲惨、無知、習慣、迷信、偏見だと言うデュナン。何が世界平和へと、その生涯を捧げさせたのか。子どもたちと語り合ってはどうか。」と提案したことは重要で、本書出版の本意もまたここにあるのである。



『地球のなぞを追って』

大月書店 2006.1

地学団体研究会 著

柴崎 直明 共著

請求番号：450.7/C43c

本書は、地学団体研究会(略称、地団研)というユニークな学術団体が、国内や海外のさまざまなテーマについて研究をすすめるだけでなく、市民への地球科学の普及や研究をすすめるための条件作りに取り組んできた活動の軌跡をとりまとめたものである。地球のなぞにせまるテーマは、私たちの足元や普段目にする山々、地層や岩石中の微化石、

火山灰、鉱物など、いたるところに存在する。また、国内外における土砂災害や地震災害、環境問題の発生も、長い地球の歴史と、自然と人間の関わりが重要な背景となっている。こうした地球科学に関するさまざまなテーマについて、地団研は「みんなで科学を」を合言葉に、大学教員、小中高校の教師、研究者、学生・院生、地質技術者などが団体研究という独特の手法を採用して研究をすすめる、市民の立場に立った科学運動を行っている。2006年8月から筆者が地団研の会長に就任したが、今後ますます社会との接点を大切にしたい魅力ある活動をすすめていきたいと考えている。

目 次

- 巻頭言「図書館随想」..... 澤 正宏 (1)
- 思い出の一冊『O.Henry 短編集』..... 高橋 隆行 (2)
- 「カウンターの内側から」..... 高玉宏太郎 (2)
- 「海外の図書館事情」(スイス)..... 鈴木めぐみ (3)
- 「学術機関リポジトリ!!」..... 小沢 喜仁 (4)
- 貴重本『Johan Frederik von Overmeer Fisscher』..... 磯崎 康彦 (5)
- 祝日開館開始! / 図書館メールマガジン「library Today」..... 図書館から (5)
- 「各種出版物に掲載された経済学部関係逸話」~『信夫の風』~ (2)..... 新保 芳栄 (6)
- 「利用者の声」一般開放に感謝!..... 西山 泰男 (7)
- こんなものがあったのか! 『日本山岳遭難史』..... 鈴木 貴士 (7)
- 学内教員著作寄贈図書の紹介
- 『赤十字の父 アンリー・デュナン』..... 九頭見和夫 (8)
- 『地球のなぞを追って』..... 柴崎 直明 (8)